

津博

TSUHAKE

2024.5 No.120

トピックス

- ミニ企画展「文様を楽しむー染型紙の技とデザイナーー」
- 企画展「郷土の刀剣Ⅲ」
- 第129回・130回文化財めぐり
- 「津山松平藩町奉行日記三十（文化九年）」刊行

資料紹介

- 考古資料この一点⑩
— 亀甲形陶棺と家形陶棺 — 小郷 利幸

お知らせ

- 年間計画



津山郷土博物館
Tsuyama City Museum

ミニ企画展「文様を楽しむ－染型紙の技とデザイン－」を開催しました。

令和6年1月20日（土）から2月12日（月）まで染型紙のミニ企画展を開催しました。

型紙は、着物などの生地^{しろこ}に文様を染める際に用いる道具です。江戸時代には、現在の鈴鹿市にある白子などで多く生産され、この地の商人が全国へ売り歩きました。

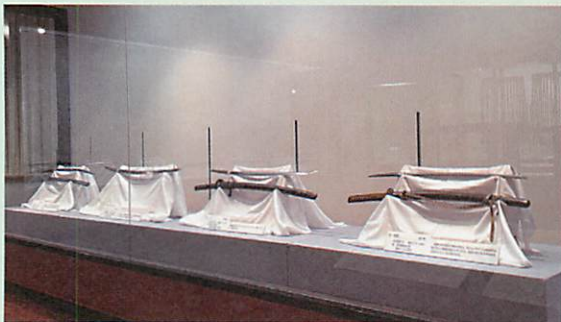
さまざまな文様が彫り込まれた型紙のほか、古文書なども展示しました。

職人の手による精緻な細工に、多くの方が驚かれています。



ミニ企画展のチラシ

企画展「郷土の刀剣Ⅲ」を開催しました。



企画展のようす

令和6年2月17日（土）から3月24日（日）まで、「郷土の刀剣Ⅲ」を開催しました。本展覧会では、江戸時代初期の刀工「兼景」や中期の「細川正義」・「多田金利」らの刀剣をはじめ、現代の津山の刀工が打った現代刀など、津山にゆかりの刀剣約20点を展示し、刀剣ファンの方を始め、たくさんのお客様が見入られていました。

『津山松平藩町奉行日記三十（文化九年）』を刊行しました。

博物館で所蔵している津山藩の資料から、町を管轄していた町奉行の日記を活字化する作業を続けています。昨年度は文化9（1812）年の町奉行日記を活字化し、刊行しました。

文化9年の5月、宮川で洪水が発生、黒沢山あたりでは水が噴き出し山崩れが発生しています。その他、塩魚の振り売りについてなど内容は多岐にわたります。ぜひご一読ください。郷土博物館で600円で頒布しています。

第129回文化財めぐり ～神代・桑下地区の文化財をめぐる～

○倭文ふれあい学習館～貴布祢神社～大蔵池南製鉄遺跡（岡山県指定史跡）～稻荷神社・米崩観音堂～構城跡～西御殿跡（津山市指定史跡）～瓢箪山1号墳（津山市指定史跡）～○倭文ふれあい学習館（参加者9名）

令和5年11月11日（土）津山市神代・桑上・桑下地区の文化財をめぐるしました。今回は吉井川の支流倭文川北岸地区をめぐるルートです。貴布祢神社は、境内社の奥御前神社の「狼様」が有名で、霜月大祭には多くの参拝者で賑わい、狼の好物の塩を御供えする風習があります。大蔵池南製鉄遺跡は、美作地域でも古い時期の製鉄遺跡で、調査後現地に保存されています。構城跡は、堀切や土壁に囲まれた曲輪が残る城跡です。西御殿跡は幕末の長州征伐の際に、敗れた浜田藩が作州の飛び地に逃れ、「鶴田藩」を興した際の御殿跡、その東側丘陵にあるのが、全長35mの前方後円墳である瓢箪山1号墳です。当日は、肌寒い気候でしたが、往復約8km程の行程を無事にめぐりました。



文化財めぐり風景（貴布祢神社）

第130回文化財めぐり ～油木北地区の文化財をめぐる～

○倭文ふれあい学習館～少彦名神社～倭文神社～奥の前1号墳（津山市指定史跡）～殿田1号墳（銅鏡：津山市指定文化財）～○倭文ふれあい学習館（参加者9名）

令和6年3月16日（土）津山市油木北地区の文化財をめぐるしました。今回は前回に引き続き吉井川の支流倭文川西岸地区をめぐるルートです。少彦名神社と倭文神社は、隣接して立地しますが、それぞれ地域の氏神様で、前者には貞享4（1687）年の修理の棟札が、後者には天保12（1841）年に再建された棟札があり、良く似た造りの本殿です。奥の前1号墳は、丘陵上にあるため山道を少し登り到着しました。墳長65mの美作では大形の前方後円墳で円筒埴輪がめぐります。後円部頂に長持形の石棺があり、かつて銅鏡1面、銅鏃、鉄剣、短甲などが出土しています。特に短甲は縦矧板革綴短甲で類例も少なく珍しいです。前方部にも木棺があって銅鏡などが出土しています。なお、殿田1号墳は樹木が繁茂して進入が困難なため行きませんでした。当日は、気候もよく、往復約6km程の行程をめぐるしました。



文化財めぐり風景（少彦名神社）

考古資料この一点⑩

亀甲形陶棺と家形陶棺

小郷利幸

はじめに

陶棺という焼物の棺桶があり、当館の1階古墳時代のコーナー半分以上のスペースを使って6点展示されている。当館で陶棺の特別展を実施した時の集成によれば、全国出土800例の半分近くが美作地域からの出土である(註1)。土師質と須恵質の亀甲形と家形などがあるが、ほとんどが土師質の亀甲形で、須恵質の家形は数も少なくめずらしい。

資料紹介

亀甲形陶棺は、祇園畝2号墳(図1-1、註2)の横穴式石室内に、2個の陶棺が置かれた状態を復元したジオラマ(写真1、陶棺の内1基は一宮古墳、註3)と3基の陶棺(河面丸山2号墳、同一2、註4、田



写真1 陶棺の展示風景

熊古墳、同一3、註5、皿寺山古墳、註6)を展示する。展示している亀甲形陶棺はいずれも土師質で、全長は2m前後、脚が6本3列や6本2列などのものがあり、その上に身と蓋がある。よく見ると身と蓋がぴったり合うため、一体で作った後に、身と蓋を切って、さらにそれらを2分割している。一体で作っているため、最後に外から埋める穴、いわゆる封じ孔が蓋にあることが知られている(図1右上、註7)。これら陶棺は、基本的な作り方はほぼ同じで、突帯が縦横にめぐり蓋に突起がつくのが基本スタイルで、高さや幅など全体のフォルムにはそれぞれ違いがある。

美作国建国1300年記念の平成25(2013)年に、陶棺の復元に取り組んだことがある(註8)。筆者もそれに関わり、近隣勝田郡奈義町から粘土を約6トン採取し、市内勝北陶芸の里で、備前焼作家さんの陶芸愛好家グループに製作していただいた。勝北地域の水原古墳出土の陶棺(東京国立博物館蔵)をモデルに細部まで忠実に復元した。粘土には砂を混ぜ、脚から製作し蓋と身を後から切断、さらに2分割して乾燥後、その場所と同じ粘土でレンガをつくり窯を築いて焼成、途中不慮の事故で陶棺が壊れたが、なんとか完成した(写真2)。か

なりの労力、製作技術が必要であることがわかり、さらにこれを古墳に運ぶとなると、かなりの重量(約50kg)があることから、さらに労力などが必要となる。粘土は最終的に陶棺や窯作りにすべて使用した。実際に復元することはできなかったが、作った作家の方が、もう二度と作りたくないと言っていたほど、重労働である。



写真2 復元した陶棺(勝北公民館展示)

家形陶棺は、龍壽山国分寺に伝わった伝国分寺陶棺(写真3、図2-1、註9)を展示している。須恵質で全長164cm、幅

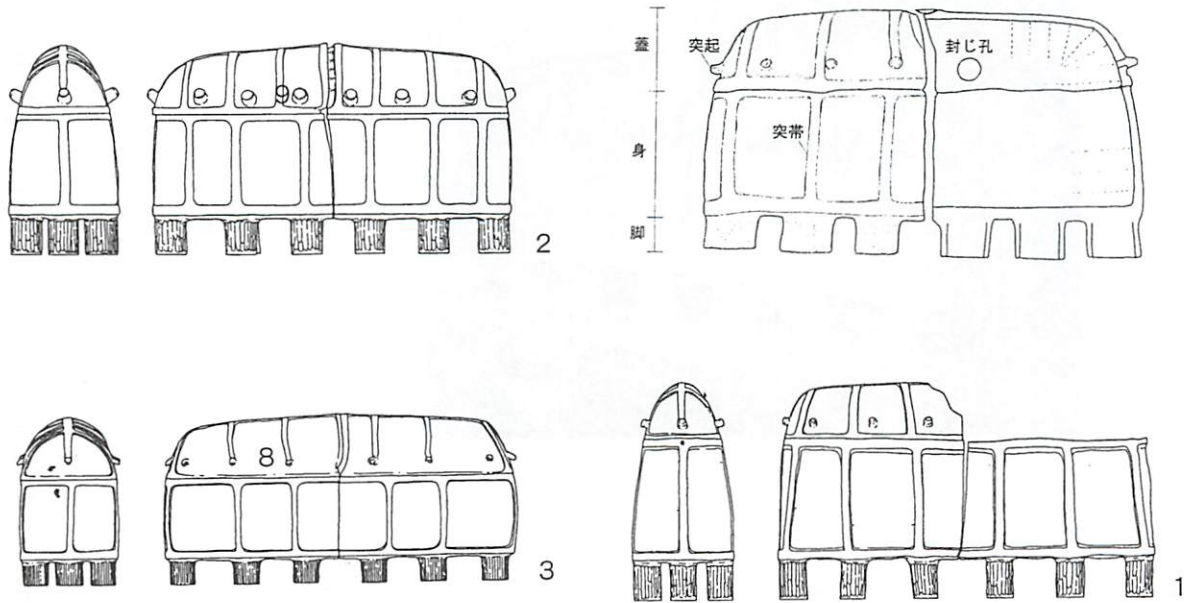


図1 亀甲形陶棺の名称（註1より引用）と亀甲形陶棺（S=40：1、註2bより引用）

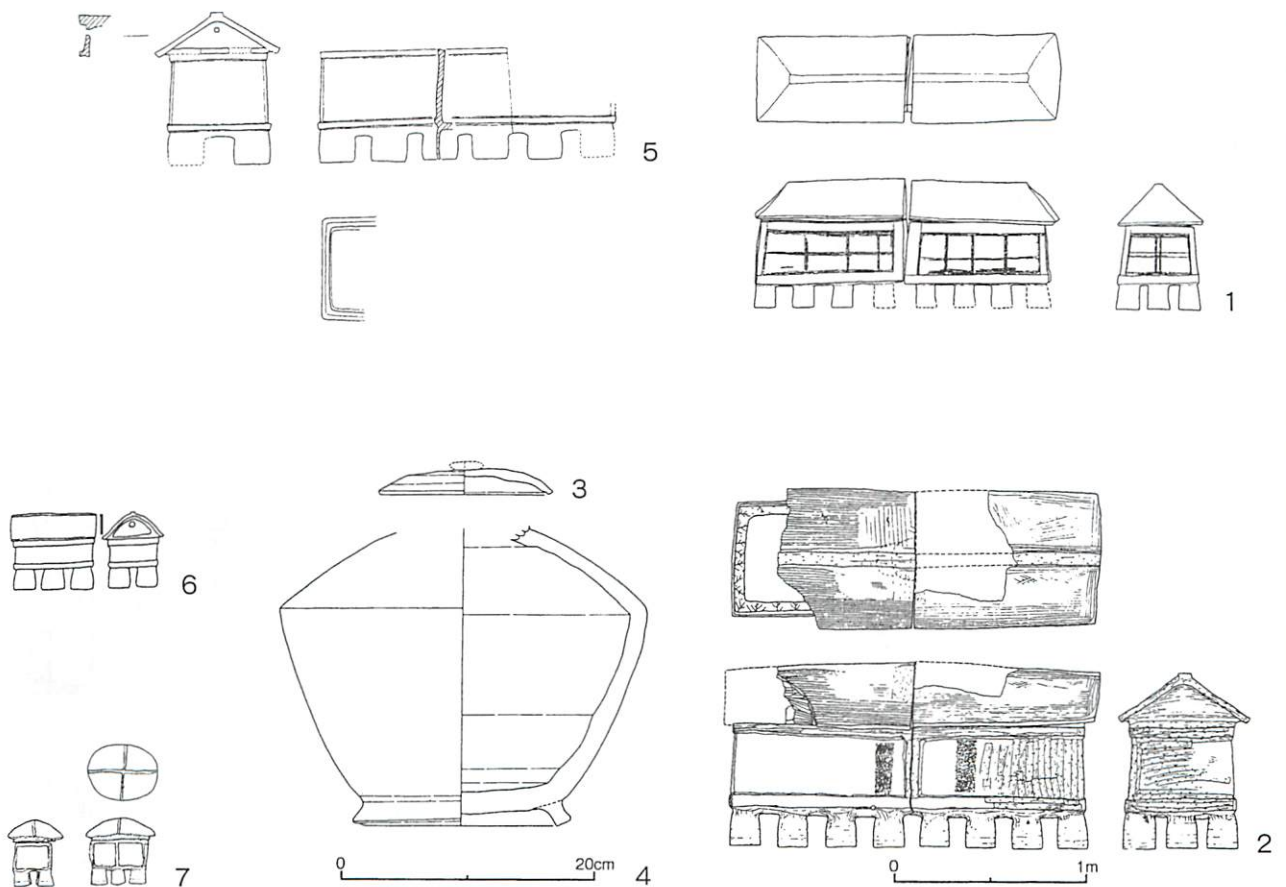


図2 家形陶棺など実測図（1・2・5～7…S=40：1、3・4…S=6：1、註9・11～13より引用）

46 cm、高さ70 cmを測る。8本3列の脚があり、身と蓋は別造りのようで、身と蓋はさらに2分割している。身の外面には、制作時に付いた格子目タタキが見られ、ハケで窓枠らしきものが側面と小口面に描かれている。内面にはタタキの当て具痕と格子目タタキの跡がある。蓋の屋根は寄棟の四柱式で、外面はタテハケの後にヨコハケを軒先部分に施している。出土場所は明瞭でないが、完形に近いので、おそらく周辺にあった横穴式石室墳の出土で、国分寺に運ばれてきたものと思われる(註10)。



写真3 伝国分寺陶棺

家形陶棺について

類例の少ない家形陶棺について、若干まとめてみたい。家形陶棺の分布を見ると、

岡山県内では、須恵質は南部の備前・備中地域に多い。津山では、数例の出土が知られているのみである。

釜田2号墳(図2-2、註11)。

市内戸脇に所在する直径6 m程の円墳で、残存長2・7 m程の無袖の横穴式石室内からの出土である。陶棺は土師質で、全長194 cm、高さ91 cm、幅57 cmを測り、身と蓋は一体に造られ、さらに2分割される。8本3列の脚があり、身の外面には、格子目タタキの後ヘラ削り、内面はナデ調整である。蓋の屋根は切妻で外面はタタキ後に横方向のナデ調整である。陶棺の周囲には、須恵器や土師器による骨蔵器4点(図2-3・4)が追葬される。

明見峪1号墳(図2-5、註12)

市内横山に所在した円墳で、全長7・2 m、幅1・3 mの無袖の横穴式石室の奥に土師質亀甲形陶棺、手前に土師質家形陶棺が出土した。家形陶棺は、全長158 cm、幅56 cm、脚は6本2列である。身の外面は、格子目タタキの後タテハケが、内面には同様に格子目タタキの後に同心円文が僅かに見られる。この事から外面の格子目タタキが内面より後と思われる。蓋の屋根は切妻で小口部分のみ残存し、小口には円孔がある。屋根の外面は格子目タタキの後にタテハケ、内面は同心円文のみ見られる。身蓋とも外面は赤色に塗られている。

津山市河辺出土(東京国立博物館蔵、図2-6、註13)

長さ41 cm、高さ13・5 cm、須恵質の小形で、3本2列の脚が付き、身の上下に突帯がめぐり、その内部に格子目タタキが見られる。蓋の屋根は切り妻で小口側に円孔がある。

最後に陶棺の最終形態と思われる例を紹介したい。

下谷墳墓(図2-7、註14)

市内加茂町公郷の出土で、分布調査の際に崖に露出していて、急遽採集された。4枚の板石による一辺60 cm程の石室内から、須恵器の平瓶、壺、骨片などと一緒に出土した。須恵質で3本2列の脚があり、身は長さ31 cm、幅20 cm、高さ14 cmで、その上に長さ37 cm、幅30 cm程の蓋が付く。蓋・身とも突帯により区画され、蓋はやや丸みがあり、陶棺と言うよりは、人骨もあり骨蔵器そのものである。

以上から、陶棺は横穴式石室に複数入る場合があり、明見峪1号墳の場合は、最初が亀甲形、後が家形である。また、釜田2号墳は家形が1基のみの大きさで、骨蔵器4点が後から追葬されている。伝国分寺陶棺は、釜田2号墳と比べると、やや小型化しており、さらに津山市河辺出土や下谷墳墓は、さらに小形化し、それ自体が骨蔵器となつているものもある。小形化は、時代的には新しい傾向で、骨蔵器が古墳に追葬される例は、新たに古墳は造らないまでも、一族の墳墓としての認識が色濃く残つていた証拠でもある。

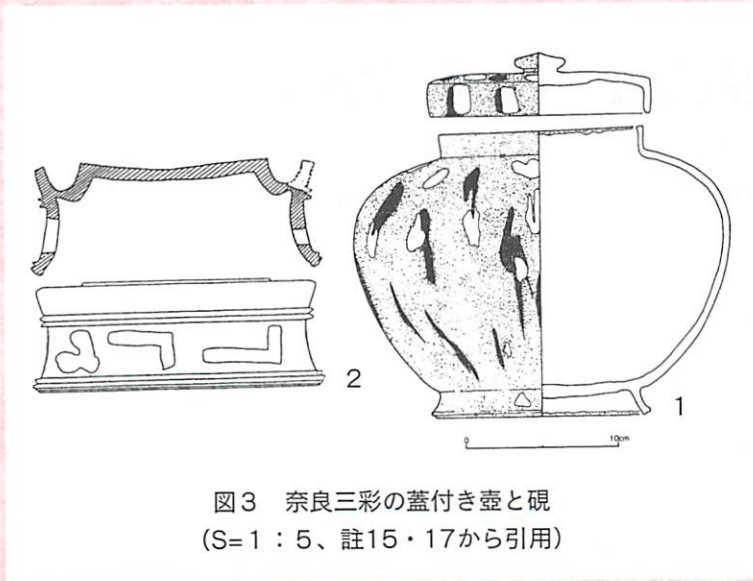


図3 奈良三彩の蓋付き壺と硯
(S=1:5、註15・17から引用)

おわりに

伝国分寺陶棺は、陶棺の大きさや残り具合からして、少なくとも横穴式石室に入っていたと考えられるが、場所や共存遺物の詳細が不明であるのが残念である。

最後に古墳や陶棺に関連した美作地方の古代の遺物について若干触れてみたい。

明治37年に津山近郊で出土したとされる、奈良三彩の蓋付き壺（重要文化財、倉敷考古館蔵、図3-1、註15）がある。これは陶棺などと一緒に鉢山の試掘の際に出土したとされる。国分寺地区は当時河辺村で津山（町）近郊に位置し、近くの山には明治

時代に採掘された、国盛鉢山（註16）が存在した。そのため、国分寺地区は三彩壺の出土地の候補の一つにはなる。

また、国分寺周辺の古墳から円面硯の出土も知られる（国分寺古墳、図3-2、註17）。硯は明治39年、須恵器とともに東京帝大に寄贈され、L字の透かしがある特異なもので、さらに古墳からの出土とすればとてもめずらしい。いずれにせよ伝国分寺陶棺の出土地周辺は、後に美作国分寺が建立されることから、その当時は重要な場所とされた地域である。このような場所に奈良三彩の壺や硯をもちえた人物がいたとしてもおかしくはない。伝国分寺陶棺にそれらが伴う、若しくは関連するものであれば、さらに話は面白くなる。ただこれら遺物などの出土場所が不明なので、今後のさらなる調査が望まれる。

註

- (1) 津山郷土博物館2013 『土の棺に眠る―美作の陶棺』
- (2) a 近藤義郎編1952 『佐良山古墳群の研究第1冊』津山市
b 杉山尚人1987 『陶棺の研究』『考古学研究第33巻第4号』考古学研究会
- (3) 本館蔵
- (4) 今井堯1972 『原始社会から古代国家の成立へ』『津山市史第1巻原始・古代』津山市、註2b
- (5) 本館蔵、註2b
- (6) 本館蔵

(7) 村上幸雄・橋本惣司1979 「亀甲形陶棺の製作工程について」『考古学研究第26巻第2号』考古学研究会

(8) 美作国建国1300年記念事業実行委員会2014 『記録で伝える美作国』

(9) 当館への寄託資料である。
豊島雪絵2020 『国分寺出土陶棺』『新修津山市史資料編考古』

(10) 国分寺地区に隣接した上瓜生原の三太林から出土と言いつた伝えがある。三太林には、現在も古墳がある。赤坂健太郎氏にご教示をえた。

(11) 村上幸雄1980 『椋山遺跡群Ⅱ』久米開発事業に伴う文化財調査委員会

(12) 湊哲夫2020 『明見古墳群』『新修津山市史資料編考古』

(13) 間壁忠彦・間壁霞子1981 『岡山県下の奈良・平安期墳墓集成』『倉敷考古館研究集報第16号』倉敷考古館

(14) 加茂町史編纂委員会1975 『加茂町史本編』、註11

(15) 間壁忠彦1988 『美作津山近郊出土と伝える奈良三彩蓋付壺』『倉敷考古館研究集報第20号』倉敷考古館

(16) 明治15年に発見され、同25年頃が最盛期で、銅、硫化鉄を同40年頃まで採掘していた。

勝田郡役所1912 『勝田郡誌』

(17) 内藤政恒1944 『本邦古硯考』養徳社（内藤政恒2013 『こと典百科叢書第35巻』大空社で再刊）

令和6年度 津山郷土博物館 行事予定

※変更する可能性があります。

詳細は決定次第ホームページなどに掲載いたします。

◆特別展・企画展など

- ・企画展示「江戸一目凶屏風実物展示－蕙齋ワールド2024－」
会期：3月30日（土）～5月6日（月）
 - ・企画展「博物館探検（仮）」
会期：7月13日（土）～9月29日（日）
 - ・特別展「考古資料は語る－美作津山の古墳文化－」
会期：10月12日（土）～12月15日（日）
- この他にもさまざまな企画展を開催する予定です。

◆出版

- ・特別展図録「考古資料は語る－美作津山の古墳文化－」の刊行
- ・津山松平藩町奉行日記31の刊行
- ・令和5年度年報の刊行

◆広報活動

博物館だより「津博」

No.120：5月 No.121：8月 No.122：11月 No.123：2月

◆教育普及活動

- ・古文書講座 全9回
- ・歴史講座 全9回
- ・夏休み体験教室
- ・文化財めぐり 全3回

※人事異動（令和6年4月1日付け）

新任 学芸員 綱澤 広貴



博物館だより「つはく」
No.120 令和6年5月31日



【編集・発行】 津山郷土博物館

〒708-0022 岡山県津山市山下92
Tel (0868) 22-4567
Fax (0868) 23-9874
E-mail tsu-haku@tvt.ne.jp

【印刷】 二葉



入館のご案内

- 【開館時間】 午前9:00～午後5:00
【休館日】 毎週月曜日・祝日の翌日
年末年始（12月29日～1月3日）・その他
【入館料】 一般…300円
（30人以上の団体の場合240円）
高校・大学生…200円
（30人以上の団体の場合160円）
65歳以上…200円
（30人以上の団体の場合160円）

中学生以下・障害者手帳を提示された方は入館料が無料です